

博士學位論文

内容の要旨

および

審査結果の要旨

第 10 号

平成 27 年 12 月

神田外語大学

はしがき

本号は学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条による公表を目的として、平成 27 年 9 月 15 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

目 次

1. 李 榮 博士 (言語学)

学位論文題目

文の複雑さ、および読み手の統語知識と作動記憶容量が日本語説明文の理解に
与える影響 —韓国語母語話者と中国語母語話者の場合—

・・・・・・・・・・ 3

氏名（本籍） 李 榮 （韓国）

学位の種類 博 士 （言語学）

学位記番号 乙第 3 号

学位授与日 平成 27 年 9 月 15 日

学位授与の要件 大学院学則第 14 条 3 項

学位論文題目

文の複雑さ、および読み手の統語知識と作動記憶容量が日本語説明文の理解に与える影響 —韓国語母語話者と中国語母語話者の場合—

学位論文審査委員 主査 神田外語大学大学院 教授 堀場 裕紀江

副査 神田外語大学大学院 教授 木川 行央

副査 神田外語大学 英米語学科 准教授 Siwon Park

副査 南山大学 人文学部 教授 鎌田 修

論文内容の要旨

本博士論文は、第二言語（L2）として日本語の説明文の読解について、テキストに関わる要因（テキストの統語的複雑さ）と読み手に関わる要因（統語知識、および、作動記憶容量）がどのように影響するかを、韓国語および中国語を母語とする学習者を対象として、日本語母語話者のデータも参照にして、調べた実証研究の結果を報告し考察している。本論文の構成と主な内容は以下のとおりである。

第1章：L2によるテキスト理解は、多くの認知的処理に関わる負荷の高い高度な知的活動であるが、テキスト要因と読み手要因の関わりが十分解明されていないとし、本研究の目的とするL2日本語説明文理解についての実証的研究の概要、および、本論文の構成について述べた。

第2章：本研究に関連する読解理論についての先行研究、および、L2テキスト理解についての先行研究を概観した。テキスト理解の理論・モデルについては、ボトムアップ処理とトップダウン処理、および、その相互作用について述べ、Kintsch (1998)のモデルを説明した。Kintschモデルによると、読み手はテキスト処理を通して、複数のレベルからなるテキスト心表象を形成するが、主なテキスト心表象レベルは命題テキストベースと状況モデルであるとしている。また、L2テキスト理解の先行研究については、読み手に関わる要因として母語の読解力、L2言語知識（特に統語知識）、作動記憶を取り上げた。

第3章：本研究の研究課題とし以下の質問を提示した。(1) テキスト再生率は、テキストの統語的複雑さによって異なるか。また、それは読み手の母語背景によって異なるか。(2) テキスト再生率は、統語知識（上位群・下位群）、および、作動記憶（上位群・下位群）によって異なるか。また、統語知識と作動記憶容量の交互作用による効果が見られるか。さらに、それらは母語背景によって異なるか。

第4章：調査方法を説明した。対象者は日本語学習者（韓国語母語話者48名と中国語母語話者48名）および日本語母語話者48名である。4編の説明文テキストを統語的複雑さの高条件（オリジナル）、低条件（埋め込み節を含む文を2つ以上の文に分け、テキストの50%以下の範囲で操作した）で提示した。各協力者は2編を高条件で2編を低条件で読んだ。テキスト理解は、母語による筆記再生テストにより測定した。統語知識は、文接続（30問）と連体修飾（20問）についての文完成式筆記テストにより、作動記憶容量は日本語RSTにより、それぞれ測定した。さらに背景質問紙調査も行った。

第5章：主な結果は以下のとおりである。(1) テキスト再生率について、韓国語話者は、

テキスト全体および操作あり部分について、複雑さ高条件の方が低条件より有意に高かった。中国語話者および日本語母語話者は、統語的複雑さによる有意な効果は見られなかった。(2) テキスト再生と文完成および RST の相関関係について、韓国語話者は、複雑さの両条件で、テキストの対象部分にかかわらず、再生と文完成および RST との間に有意な中程度の相関が見られた。中国語話者は、再生と文完成との間に（複雑さ低条件の操作あり部分を除いて）有意な中程度の相関が見られたが、RST との間には有意な相関は見られなかった。母語話者は有意な相関はなかった。(3) 韓国語話者は、操作あり部分の再生について複雑さ条件と作動記憶容量の交互作用が見られたのに対し、中国語話者は、テキスト全体および操作あり部分の再生について統語知識と作動記憶容量の交互作用が見られた。(4) 統語知識と作動記憶容量の相対的効果について、韓国語話者は、統語知識の効果がテキスト統語的複雑さの高条件（操作あり部分を除く）と低条件で見られ、作動記憶容量の効果が、テキスト統語的複雑さの高条件（操作あり部分を除く）と低条件（操作なし部分を除く）で見られた。中国語話者は、統語的知識については検定できず、作動記憶容量の効果はテキストの対象部分・複雑さ条件にかかわらず見られなかった。

第6章：前章で述べた結果を考察した。(1) テキスト統語的複雑さについて、韓国語話者は複雑さ高条件の再生率が複雑さ低条件の再生率に比べて高かったという、先行研究の結果とは異なる結果であったが、これは統語的複雑さ低条件のテキストの方が文と文の繋がりを見出して情報を統合するというより難度の高い処理を要求するからではないかと考えた。中国語話者は統語的複雑さによる再生率への効果が見られなかったが、これは統語的複雑さ条件に関わらず一文一文の処理のとどまり情報の統合が行われていないからではないかと指摘した。(2) 統語知識と作動記憶容量の効果について、韓国語話者の場合、統語知識の効果はテキスト統語的複雑さによって異なり、統語知識と作動記憶容量の両方の効果が複雑さ低条件での操作されなかったテキスト部分の再生率についてのみ見られたことについて、テキスト中の文を処理しながら文と文の間の照応関係を処理して情報を統合していくことの困難さが表れたと推察した。中国語話者の場合、統語知識による効果は認められたが作動記憶容量による効果は認められなかったことについて、統語知識を駆使してテキスト処理を進めるが、読みがテキストベースのレベルにとどまり、テキスト条件による理解の違いとして表れなかったのではないかと推察した。

第7章：結論として、L2日本語説明文の理解は、テキストの統語的複雑さ、および、理解は、読み手の統語知識と作動記憶容量の影響を受けるかもしれないが、その影響は学習者の母語背景によって異なると述べた。さらに、本調査研究の限界、および、今後の研究への課題を述べた。

審査結果の要旨

李榮氏の博士論文は、第二言語（L2）としての日本語の説明文の読解について、テキストに関わる要因（テキストの統語的複雑さ）と読み手に関わる要因（統語知識、および、作動記憶容量）がどのように影響するかを調べるために、韓国語・中国語を母語とするL2学習者、および、日本語母語話者を対象に行った実証研究である。研究テーマの選択、研究の内容・方法の点で斬新性があり、周到な計画のもとにデータ収集・分析が行われ信頼性を確保しており、実証研究として優れている。L2読解に関わるテキスト処理とテキスト表象形成のメカニズムを探るべく、テキストの統語的複雑さに操作を加えた上で、読み手の統語知識と処理能力の関わりを同時に調べた研究で、母語背景の異なる2つの学習者グループを対象に実証研究の少ないL2日本語読解について行った研究として、研究史的意義のある研究である。

先行研究については、テキスト理解についての認知的アプローチによる理論研究、L2読解における読み手に関わる要因（母語の読解力、L2言語知識（特に統語知識）、作動記憶）についての研究、L2読解におけるテキストに関わる要因（テキストタイプ・言語的複雑さ）についての研究と、言語心理学・応用言語学・言語教育学・L2習得研究分野の先行研究・文献を広く読み、L2読解の関連先行研究の内容・方法を整理して未解決部分を明らかにし、本研究の研究課題へと議論をつなげている。

研究方法については、研究課題に対して綿密かつ慎重な計画のもと量的手法で追求した意欲的な研究と言える。読み材料（4編の説明文とダミー）の選定、テキストの統語的複雑さの操作、テストタスク（文法テスト、リーディングスパンテスト）の設計と作成、そして実験そのものが十分な配慮と適切な判断のもとに行われている。データ分析やテスト結果の統計処理も適切で丁寧に行われており、全体的に信頼のおける結果であると考えられる。

得られた結果は整然と提示され詳細に記述されている。結果の考察は、本研究の課題質問に答えるべく論理的に議論されている。テキストの統語的複雑さ低条件が、文と文の繋がりを見出して情報を統合することを要求する、という読み手にとって負荷のかかる処理を伴う条件であったのではないかと、という考察は妥当なものである。しかし、この考察において理論的解釈をさらに加えてより深いレベルで議論されれば、本研究の結果がL2読解における認知メカニズムの解明の一助となるのがより明確にできるのではないだろうか。また、中国語母語話者について作動記憶容量が関与していないのはなぜかについて、調査者が以前行った質的分析の結果（2010）と同じ解釈ができないかとしているが、この点についてももう少し議論してほしいところである。結論、および、今後の研究への課題

と教育的示唆は妥当であろう。

本研究の意義として特に以下の点が挙げられる。(1) 従来のL2読解研究における読み手要因(統語知識と作動記憶)とテキスト要因[文の統語的複雑さ]の関わりとそれらの相互作用について直接的に調べた研究はほとんどない。本研究は単一研究の中で実験的手法を用いてその言語処理・認知処理のメカニズムの一部を明らかにしており、貢献度が非常に大きい。(2) 従来のL2読解研究は欧米語を対象にしたものがほとんどであり、異なる体系の母語を有するL2学習者を比較分析した研究は数少ない。本研究はL2日本語の説明文読解について、体系の異なる母語を有する中国語話者と韓国語話者を対象に実証的に取り組んだという点も意義が大きい。

以上のことから、李氏の博士論文は、L2読解におけるテキスト要因(文の複雑さ)と読み手要因(統語知識と作動記憶)のインタラクションを解明するために質の高い実証研究を行い、これまでの研究成果をさらに発展させ新たな知見を提供しており、その点で国内外の日本語教育分野だけでなく、広く応用言語学・第2言語習得研究分野における知識の向上に貢献できると言える。よって、合格と判断した。

博士學位論文

内容の要旨
および
審査結果の要旨

第10号
平成27年12月

発行 神田外語大学大学院
〒261-0014 千葉県千葉市美浜区若葉1-4-1
Tel. 043-273-1320
Fax 043-273-1197